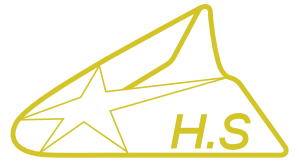


Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌



二度目の学校廃校の危機に直面して

教頭 安河内 敏

本校は開校当初から常に存亡の危機と隣り合わせでした。その中でも一九八八年の生徒減による一回目の廃校の危機はすんでのところ、全国から高校中退生を受け入れる「転編入制度」を始めたことにより、息を吹き返しました。それは本校の中で脈々と醸成されてきた集団の中でこそ個は育つという教育があったから可能なものでした。また当時は、学校にいけない、いけない、という子どもの行き先がない状態であったことも、全国から生徒が集まる大きな要因でした。

現在は、少子化が進行しているものの、小・中学校の不登校生の数（年間三十日以上欠席）は十二万人台であり、十年前とそんなに変わっていません。大きく変わったのは受け皿が増えたことで

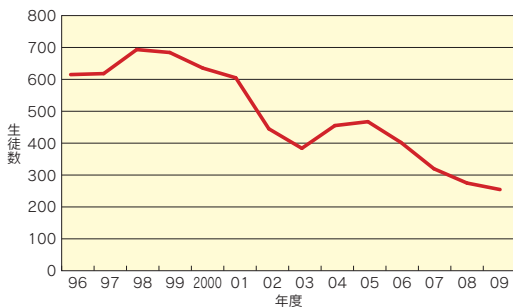
す。特に通信制高校には十八万人在籍しており、数字上は不登校生がすべて通信制に吸収されてもおかしくない状況です。しかし、実際には十八万人中六万人以上が一位もとれていません。退学者数四万人・進路未決定四割。このような数字を見たときに、結局は受け皿が多くなっても、本質的な問題を先送りしているようにしかみえません。

ですが、余市校には九十名の定員が三年連続で確保できなかったときは、存続を見直すことが学園将来構想で決定しています。昨年は新入生六十名という危機的数字でした。今年度は通信制高校ではできない、「集団の中で個は育つ」という実践が本当に必要なのだということ募集活動の中心に据え、あらゆる手を使って募集活動を展開しています。どうか同窓生のみ

なさんも、九十名生徒確保にお力をお貸しくださるよう、お願いいたします。



過去10年間の在籍者数



二〇〇九年度 入試委員会の取組み

二〇〇九年度入試委員長 田中 亨

いつも生徒募集の取組みにご協力いただきありがとうございます。入試委員会は教員会議で決めた戦略のもと、①「委員会」として発展的な募集活動を見出す、②「つながり」ある募集活動を展開する、③教師自らが北星余市の教育を発信することを意識して活動を進めております。生徒減の原因は、**ア**不登校生受け入れのすそ野が広がっている、特に通信制教育に流れている、**イ**経済的な問題で通えないことの二つの壁が存在します。これは様々な場面で我々が見聞きし、分析した判断です。**ア**に関しては、端的に申し上げて、この時代において我々が子供をどう育てたいのかということ、今一度再確認し発信していく必要があると考えております。同時に、通信制教育がいかなる状況にあるか、子供の将来にとってどういう影響を及ぼすかを伝えていく。それは不断にみなさんが草の根的に活動してくださっていることに相乗的な効果を生みだします。**イ**も大きな壁です。これは、従来の奨学金制度を充実させる必要があると同時に、考え方によるところも大きいと考えております。というのも、通信制教育にかかる費用も意外と高く、北星余市に通うのと大差ないという現状があるからです。

この紙面ではまとめられませんが、やるべきことをやる。今までやっていなかったことをやる。それまでとこれからの地道な活動を相乗的に組み合わせ、どこかの時点で化学反応を起こしたい：抽象的ですが、そのように考えて活動しております。

受容と共感をもって

北星学園余市高等学校 教諭 二七期 妹尾 克利



卒業生の皆さんこんにちは。
私は数年間会社勤めをしており、
ましたが、いつしか教師を志し、
三十歳になる年に母校に赴任し
ました。昔お世話になった先生方
と一緒に働くというのは、初めは変
な感じがしましたが、今はすっかり慣
れ、楽しく仕事をさせて頂いております。

ここにいと、在学中の思い出が、いつまでも色褪せず、
むしろ時が経つほど鮮やかに浮かび上がってきます。様々
なタイプがひしめきあう学校、人口密度の高い寮生活の中
で、何かと不便を感じながらも青春を謳歌した三年間の経
験は、人格形成の礎となり、今の私をしつかりと支えてい
ます。

あの頃、育ちの未熟さ、関わりの貧しさを、集団生活と
いう実験によって補い、他人との関係に喜びを感じられ
るようになったのは、同じ境遇の仲間たちは勿論、先生方
や、寮のおじちゃんおばちゃんのように「どんな君でも大
丈夫」という受容と共感をもって接してくれる寛大な大人
たちとの出会いがあったからだと思います。

「人間関係とは相互的なものであり、決して一方的視点
で見えてはいけない」北星の教師になった今、このことを置
き去りにしてはいないか、常に自問自答しています。ここ
に集まってくる生徒たちは、皆共通し

て、自分に正直で、それでいて人格的
パワーを秘めています。(わがままも
含めた) 個性的意思が強いぶん、大人
と衝突したり、理解されないことも多
いですが、そんな彼らの中に秘められ
た人格的パワーを引き出すことが我々
の使命です。そのためには、たとえ正
論であっても、一方的に理屈を押し付
けるような狭い大人にはならず、当時
の心境を思い出し、受容と共感をもっ
て子どもたちと向き合っていきたいと
考えています。



故郷

三二期 近藤 信之輔



「しん、来たよー」
店の玄関の戸が開いた。どっかで
聞いた声だなあーと思って、カウん
ター越しに目をやると、平野のおじ
ちゃんとおばちゃんでした。そして、
その後ろには松村さん夫婦と空と滴
もいて、ものすごく驚きました。びっくりし過ぎて、
ホントに声が出なかったです。

その日は、月に一回のJAZZライブの日で席があ
まりなかったのですが、おじちゃんもおばちゃんも
「いいよ、いいよ、どこでもいいよ」

と、言ってくれたので狭い中なんとか座ってもらい
ました。その日、おじちゃんとおばちゃんは松村さん
夫婦にさそわれて、秋田の竿燈祭に行ってきたそう
で、その帰りによってくれたそうです。たいした、お
もてなしもできなかったのですが、おじちゃんもおば
ちゃんも松村さん夫婦も美味しかったよと、言っても
らい、すこしは成長した姿を見せる事ができてよかつ
たなあと思いました。

今から、約十年前母の姉や新潟出身の保護者の方の
力を借りて、私は北星学園余市高校に編入試験の願書
を出しました。その時の気持ちはと、聞かれると正し
くは、覚えていませんが、絶対に卒業してやるぞ、絶
対に我慢するぞとは思っていました。

編入試験前日初めて、一人で飛行機に乗り千歳空港
に降り、電車で余市へ向かいました。

そして、余市に着いて一番最初に向かったのが平野
さんの家でした。確かおばちゃんは仕事で居なくて、
おじちゃんがむかえてくれました。学校は三学期も終
わり、下宿をしていた三人の先輩方もいて、いろい
ろな話をしてもらいました。おばちゃんが帰ってき
て、みんなで夕食を食べて翌日に備えました。

筆記試験を終え、面接をしてくだ
さった校長先生がとても印象的でし
た。こんな校長先生がいるんだと思
い、興奮しながら平野さん家に帰りまし
た。私は不安でしたがおばちゃんが、
「大丈夫」

と、言ってくれたので、安心して私は平野さ
んの所で下宿させて下さいとお願ひして新潟に帰
りました。

それから一年、私の北星での生活が始まりました。
辛い事なんて何一つなく、北星、北海道、北の大地を
楽しませてもらいました。

年齢や出身地、男と女にも関係なく、みんな一つ
の目標を目指して、生徒、先生、下宿のおじちゃん、
おばちゃん、余市の町の人達みんなが一つになってい
たなあとは今は、そう思います。最近になってすごく思
う事は、

「やっぱり最後は人間だな、人だな」

と、思います。十代の血気盛んな青春時代を北の大
地、北星高校で過ごし、各、都道府県の同年代の人と
一緒に晴れの日も雪の日も生活した事が私の今の仕事
にも活かされていると思います。本当に良い経験をさ
せていただきました。

ある日、平野のおばちゃんから、

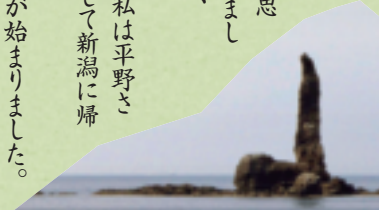
「かきの種とお米ありがとねー。しん、元気にしてる」
と電話がありました。

「おばちゃんも元気ですか？ おじちゃんも元気に
していますか？」

その翌週、おじちゃんとおばちゃんから、おしい
りんごが届きました。

そんな関係を
これからも大事
に大事にしてい
きたいです。

近藤君は2007年5月に
和食の素敵なお店をオープンしました。
お昼のランチもやっています。
是非足を運んでみて下さい。
美味彩葉"うをくら"
新潟県新潟市中央区紫竹3-1-9



ひとのいざば聞いて

教員OB 木村友季子（旧姓：新谷）



一九八二年三月に北星余市高校を退職後、私は子育てをしながら、いくつかのボランティア活動に携わってきました。

七年前からは、週に一回「札幌日本語クラブ」というボランティア団体で、外国人に日本語を教えています。生徒は、英会話講師、大学教員、日本人の配偶者、留学生の家族などで、出身は、韓国、中国、ベトナム、ロシア、イギリス、ポーランドなど十カ国以上です。生徒のレベルは、日本語を初めて学ぶ人から、自分の思っ

ていることが表現できる人まで様々で、学習目的も「テレビを見て、家族と一緒に笑いたい」、「子供の学校からのお便りが読めるようになりたい」、「日本語能力検定試験に合格したい」等、とても意欲的に勉強しています。

数年前、私のクラスに、日本人と結婚したアイルランド人で、英会話講師の男性がいました。ある日、クラスが終わると「先生、お疲れさまでした」と彼はにこやかに私に言いつて帰りました。ところが、私には何かしら違和感がありました。「お疲れさまでした」は年長の人に使ってもおかしくない表現です。たとえば、一緒に仕事をした人になら、終わった時、「お疲れさまでした」と言い合うでしょう。でも、教えてもらった時には「ありがとうございまし

た」が自然ではないでしょうか。文法に間違いがなくとも使う場面に適さないと、相手に失礼になることがあります。それは、日本語を外国語として用いる人のみならず、母語として用いる人にも言えることだと日本語を教えてみてあらためて感じます。ためになるのは、ひとの振りだけではなさそうです。



北星余市にいた頃と変わらず、教えることを通して学ぶことがたくさんある日々を過ごしています。



二〇〇九年十二月 同窓生 各位

北星学園余市高等学校 校長 幅口 和夫

拝啓

同窓生の皆さん、本校は二十年前から全国の不登校生、高校中退生を受け入れて指導して来ましたが、その間四千人近くの卒業生を世に送り出し、一定の評価を受けてきました。しかしこの数年間、通信制や単位制の高校が全国に乱立し、多くの子供達が安易に通信制を選択しているのが現状です。

本校の教育を守るために、お願い

本校が全国から生徒を受け入れ始めた頃、不登校生、中退生、そしていろいろな問題を起こして地元にいられなくなりながらも、学校生活をやり直したいという子供達が全国で十数万人に上り、社会問題化していました。当時の文部省は、とりあえずの解決策として、その受け皿としての通信制や単位制の高校を大量に作ったのです。また不登校の生徒は、人間関係や集団の中で生きることの苦手な生徒が多く、人間関係にわずらわれない学校として通信制を選んでいるのです。保護者も、一見学費が安く（実際はサ

では、その様な力を育てる体制が学校として必要だと考えています。

力、即ち社会の中で生きる力が重要です。通信制の高校ではそもそもその様な力を育てる体制にな

ていません。私達は、高校生の世代は、その様な力を育てる体制が学校として必要だと考えています。

是非、本校の教育を守るため、近くに通信制に行こうとしている生徒がいましたら、本校を薦めてくれるようお願いいたします。

敬具



私の発言 集団の中で身に付く社会性

北星学園余市高校 校長 幅口 和夫
本校は二十年前から全国の不登校生、高校中退生を受け入れて指導して来ましたが、その間四千人近くの卒業生を世に送り出し、一定の評価を受けてきました。しかしこの数年間、通信制や単位制の高校が全国に乱立し、多くの子供達が安易に通信制を選択しているのが現状です。

同窓会のあゆみ

- | | | | |
|--------|--------------------|---------|------------------|
| 一九六七・五 | 同窓会結成 | 一九八一・一 | 定期総会・新年会 |
| 一九六九・四 | 初代会長 筒井 末美(1期) | 一九八二・四 | 二代目会長 品田 敏広(1期) |
| 一九七四・十 | 同窓会会則 | 一九八四・十 | 会則一部改正 |
| 一九七六・一 | 北星余市高校創立十周年式典 | 一九九四・十 | 北星余市高校創立二十周年式典 |
| | 定期総会・新年会 | 一九九六・七 | 同窓会誌作成 |
| | 支部体制確立(余市・札幌・東京支部) | 一九九八・四 | 北星余市高校創立三十周年式典 |
| | 会則一部改正 | 二〇〇一・四 | 三代目会長 伊藤 賢治(7期) |
| 一九七八・十 | 同窓会十周年記念式典(三十数名参加) | 二〇〇一・四 | 会則改正 |
| | グラントピアノ学校に寄贈 | 二〇〇一・十二 | 四代目会長 馬場 希(12期) |
| 一九七九・四 | 同期会の組織作り始まる | 二〇〇一・十二 | 同窓会会員名簿作成 |
| | | 二〇〇三・四 | 同窓会会報「シリパの星」創刊 |
| | | 二〇〇六・四 | 売店運営スタート |
| | | | 五代目会長 松浦 一法(12期) |

同窓会活動

- 在校生への支援
- 就学援助金
- 行事への援助
- 強歩遠足・学園祭・弁論大会・クラブ等(全道・全国)
- 卒業生への記念品(卒業証書入れ)
- 課外活動援助(バスケットボールの寄贈)
- 校内自販機の実運用
- 卒業生名簿整理
- 同窓会報発行



応援してください!



余市町では「ふるさと余市町を応援してください」として余市の未来発展のため寄附金を募っています。詳細は余市町のホームページをご覧ください。

同窓会員奨学金について

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のため、会員の子供が北星余市へ在学中、希望した場合は月五千元を支給します。十月三十日現在、六人が該当しています。

編集後記

こここのところ年々生徒数が減っていたことは聞いていましたが、昨年春の入学人数が60名程度であることを知り、さすがに不安を感じずにはいられません。

「シリパの星」は、各地で頑張っているOBの様子を皆さんにお知らせするという大切な役割を担っていますが、今回はまず、学校の危機的状況を皆さんに知ってもらい、学校存続に向けて皆さんの力を貸していただきたいという思いから、トップ記事で学校の窮状を訴えさせていただきました。同窓会として

どこまで何ができるかはわかりませんが、「大切なものをなくしてはいけない」という私たち委員の純粋な思いが少しでも皆さんの心に引っかかり、それが何かしらの動きになることを祈りながら編集作業を進めてきました。

今回で「シリパの星」は9号になりました。ご紹介したいOBはまだたくさんいます。この先もずっと「シリパの星」を発行し続けるためにも、微力ながら同窓会一丸となって行動していきたいと思っています。皆さんのご協力を宜しく願います。(え)

Shiripaの星

Vol.9
2009年12月21日発行

【発行】北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町96番地
TEL(0135)23-2165 FAX(0135)22-6097
URL <http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>

顧問 塚原 治
編集長 松村 悦子(15期)
副編集長 松浦 一法(12期)
編集委員 安藤 栄子(1期)
本間美智子(5期)
馬場 希(12期)
平野満寿美(14期)

計報

二三期	森井 貞幸	二五期	齊藤 恵理
二三期	飯野 晋一	二三期	徳永 絢子
二六期	高木 幹	一四期	坂井 俊久
三六期	今徳 俊介	一四期	村本 敏貴
三四期	河野 陽介		

同窓会把握分